

【論文】

大学の一般体育実技における 「アダプテッド・スポーツ」を用いた授業の教育効果 The effects of an “adapted sports” university general physical education course on students

佐 藤 紀 子
Noriko Sato

目 次

- 1 目的と背景
- 2 研究Ⅰ
 - (1) 目的
 - (2) 方法
 - (3) 結果と考察
 - (4) 結論
- 3 研究Ⅱ
 - (1) 目的
 - (2) 方法
 - (3) 結果
 - (4) 考察
 - (5) 結論
- 4 今後の課題と展望

要 旨

本研究では、大学の一般体育実技における「アダプテッド・スポーツ」を教材として用いた授業の教育効果を検討することを目的に、質問紙を作成し、受講生の①ルール・用具変更の受容、②スポーツ・運動意欲、③障害者・障害者スポーツへの興味・関心の点から分析した。

その結果、以下の点が明らかとなった。①スポーツ実施者の特性に合わせてルールや用具を変更することに対する受容の度合いが授業受講後に高まった。ゲームの「面白さの保

障」や視覚障害者がスポーツを実施する上でのルール・用具変更の必要性を認識したためと推察される。②受講生のスポーツ・運動意欲が授業受講後に向上した。受講生がルール・用具を変更するというアダプテッド・スポーツを新たな課題としてとらえ、意欲が向上したのかもしれない。スポーツ・運動意欲の高い受講生と低い受講生の2つの群で検討した結果、スポーツ・運動意欲が低かった受講生の意欲が授業の結果向上した。ルール・用具を変更することにより、そのスポーツへ参加しやすくなるという体験を通じて、意欲が高まった可能性がある。③障害者や障害者スポーツへの興味、関心が授業後に高まった。障害者の競技映像視聴や擬似体験、スポーツの考案等の内容が受講生の興味、関心に影響を与えた可能性がある。

1 目的と背景

「障害のある人がスポーツを楽しむためには、その人自身と、その人を取り巻く人々や環境をインクルージョンしたシステムづくりが大切であるという考え方に基づく」言葉として、「アダプテッド・スポーツ=Adapted Sports」を提唱したのは矢部(1997)である。「どのような障害があっても僅かな工夫をこらすことによって、誰でもスポーツに参加(Sports for Everyone)できるようになる」(矢部, 2004)という考え方である。国際的に障害者という言葉自体を使わない傾向にあったことも、この造語が生まれた背景にある。草野(2004)も「『アダプト』というのは、既成のスポーツのルールや道具やコートの大きさなどを変えて障害者が障害の種類や程度に応じてやり易いかたちに修正したり、新たに障害者に合う種目をつくったりすることである」としている。つまり、アダプテッド・スポーツの実施対象者を障害者としている。

しかし、矢部(1997;2004)は、アダプテッド・スポーツを障害者のスポーツとしながらも、「スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に適合(adapt)させることによって、障害のある人は勿論のこと、幼児から高齢者、体力の低い人であっても、誰でも参加が可能になる」として、その対象を幅広くとらえている。藤田は、アダプテッド・スポーツとは「障害者や高齢者、子どもあるいは女性等が参加できるように修正された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指す」(藤田, 2006)と定義している。また、「個々人の身体状況に応じてやりやすいように工夫された運動やスポーツ」であるとして、「コートを狭くしたり、ボールを軽くしたりして行う子どものスポーツやネットの高さを男性より低くして行う女性のバレーボール、ガイドランナー(伴走者)とともに走る視覚障害者マラソン」(藤田, 2008)などを具体例として挙げ、矢部と同様に実施対象者を広くとらえている。また、植木(2017)はアダプテッド・スポーツを「スポーツを行う人々が、自身の特性や置かれた環境を勘案し、スポーツ自体の構成要素(用具やルール)や、取り巻く環境-人(家族、友人、指導者、ボランティアなど)、施設(体育館、グラウンドなど)、社会(組織、法律、制度など)-を、本来のスポーツの持つ本質を可能な限り損ねることなく、工夫し改変された、いわゆる『人にやさしいスポーツ』」だと定義した。そして、「『障がい者スポーツ』=『アダプテッド・スポーツ』では必ずしもなく、スポーツの持つ広い

概念を活かすとするれば、『アダプテッド・スポーツ』の中に『障がい者スポーツ』が含まれる」としている。

「『Adapted』の語は人間側に運動種目や施設、道具、ルールを合わせていくという意味」(草野, 1999) であるとする、アダプテッド・スポーツとは、既存のルールや用具に実施者を合わせるのではなく、ルールや用具を実施者に合わせるスポーツだと言えよう。大山 (2015) も、アダプテッド・スポーツは障害者のスポーツを含む「実践者に合わせたスポーツ」として理解され浸透してきていることを指摘している。アダプテッド・スポーツは障害者を対象として生まれた言葉であるが、現在では、幅広い人を実施対象者としてとらえるようになっていく。

近年、大学においてアダプテッド・スポーツ (障害者スポーツ) を教材として扱う授業が徐々に増えてきていることが、金山・山崎 (2010a)、藤田・金山ら (2014) の研究から推測される。金山・山崎は2008年に小学校教員養成コースをもつ大学と中学校保健体育教員養成コースをもつ大学を対象に、アダプテッド・スポーツに直接的に対応している科目として、「障害者スポーツ論」等の実施状況を調査した。その結果、小学教員コースでは回答校の13%、中学教員コースでは45%で実施されていた。その後、2013年に藤田・金山らが、中学校および高等学校保健体育教員養成コースのある大学を対象に障害者スポーツ関連授業の実施状況が回答大学の47.9%であったことを明らかにした。

また、アダプテッド・スポーツを教材とした教育の効果を検討する研究も行われている。曾根 (2016) は体育専攻学生に対し、アダプテッド・スポーツに関する内容を講義、演習、実技という形で3回の授業 (1時間90分) を実施した。授業前後の調査により、アダプテッド・スポーツの体験が障害理解の側面に望ましい影響を与え、障害の否定的なイメージが軽減される可能性があることを明らかにしている。また、永浜・藤村 (2011) は体育系学生を対象に15回の「スポーツ方法演習 (アダプテッド・スポーツ)」の授業を実施し、その前後に障害・障害者に対する認識、障害者スポーツに対する認識等について調査した。その結果、障害や障害者スポーツに対する意識が肯定的に変化することと、授業後にもアダプテッド・スポーツと障害者スポーツが同じだと考える学生が多かったことを報告している。

体育専攻学生を対象にアダプテッド・スポーツを扱う授業が増えている一方で、一般体育実技や共通教育科目において、アダプテッド・スポーツ教育に関する内容の取扱いが少ないことが示唆されていた (金山・山崎, 2010b)。そのような中、永浜 (2013)、大山 (2017) は、教養科目講義、一般体育実技において、アダプテッド・スポーツを教材として用い、その教育効果を検討している。永浜は教養科目のオムニバス形式の講義において「アダプテッド・スポーツを考える」というテーマで授業 (1回90分) を実施した。質問紙による調査を行い、授業開始前に障害者スポーツを知っている学生が9割いたのに対し、より多くの人を対象としたアダプテッド・スポーツを知っている学生は2.7%と少なかったことを明らかにした。また、授業後には受講生の多くが、アダプテッド・スポーツは障害者のためだけのスポーツではないという認識を持ったが、競技場面においてはアダプテッド・スポーツと障害者スポーツが同義である印象が強く残っていたことを示した。大山はアダプ

テッド・スポーツの実践・効果の検討に際し、「その人に合ったスポーツ」という本質から、運動能力や体格の異なった学生が混在する授業においてこそ、重要な示唆を得られるものと考えた。そこで、多様な専攻の学生が混在する一般体育授業においてアダプテッド・スポーツを実践し、学生自身がルールや用具を工夫してスポーツを行うことの教育効果を検討した。授業後に、「障害者がスポーツをするのは危険」「障害者と一緒にスポーツすることは困難」というイメージが薄れ、学生が身体障害について肯定的にとらえるようになったことを明らかにした。さらに、授業後の学生の自由記述から、アダプテッド・スポーツは障害者だけのスポーツではなく、「誰にでも」できるスポーツとして認識されたことを示唆した。その理由として、「性別や運動能力といったプレイヤーの特性が大きく異なるなかで、全員が楽しめるようルールや用具を工夫して実践するという経験が、障害の有無という観点ではなく、プレイヤーの状態に応じてスポーツを修正するというアダプテッド・スポーツの考え方を浸透させたのでは」とないかと考察している。

これらの研究は、アダプテッド・スポーツを教材として扱った授業を受講した学生の障害や障害者、障害者スポーツ、アダプテッド・スポーツに対する意識、認識の変化を中心にみたものである。それに対し、田中（2013）は非体育専攻の学生がアダプテッド・スポーツを体験することで得られる別の側面に注目し、教養としてのスポーツ文化の多様な側面への気づきに対し、アダプテッド・スポーツの持つ可能性と意義について検討している。

体育専攻学生に限らず、教養科目、一般体育実技においても、アダプテッド・スポーツを教材として扱った授業の教育効果を測る研究がなされ始めている。しかしながら、先行研究の多くは、調査方法および結果を見る限り、「アダプテッド・スポーツ」＝「障害者スポーツ」という枠から抜け出していないことがうかがえる。体力の低い者、運動能力の低い者、技能の未熟な者など実施対象を幅広くとらえたアダプテッド・スポーツの観点から授業効果の検討が行われた研究は少ない。また、調査内容についても障害や障害者、障害者スポーツ、アダプテッド・スポーツに対する受講生の意識、認識の変化を扱ったものがほとんどで、受講者自身の運動やスポーツに対する意識の変化に注目した研究は少ない。

文部科学省（2017）は「スポーツ基本計画」の中で、「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組む施策」の一つとして「スポーツが嫌い・やや嫌いである中学生を半減（16.4%→8%）」させることを示した。波多野・中村（1981）は大学生を対象にした調査において、「運動ぎらい」の発生メカニズムの中に「運動能力の低位に対する劣等感」が大きな要因としてあることを明らかにしている。運動能力の低い者がアダプテッド・スポーツを通して、スポーツ・運動に対して肯定的な印象を持つのであれば、スポーツや運動が嫌いだという学生にとってアダプテッド・スポーツが有用である可能性を見いだすことができるであろう。

しかしながら、大学生の多くは、学習指導要領（文部科学省、2008a；2008b；2009a；2009b）に基づき、中学校、高等学校において、主として技能の習得やルールを守る・大切にすることを身に付けるよう指導を受けてきている。そのような大学生が、アダプテッド・スポーツの主題である、ルールや用具をスポーツ実施者に合わせて変更することを、受容できるかどうかとも明らかにする必要がある。

本研究では、一般体育実技において、実施者にルールや用具を合わせるという考え方のアダプテッド・スポーツを教材として用いることによる、受講生のルールや用具の変更に対する認識の変化、受講生自身のスポーツや運動に対する認識の変化、さらには、先行研究同様にアダプテッド・スポーツの一つである障害者スポーツや障害者に対する興味や関心の変化について明らかにすることを目的とする。また、一般体育実技というスポーツや運動に対する意欲の多様な学生の混在が予測される授業の中で、スポーツ・運動意欲の低い学生と高い学生を比較し、アダプテッド・スポーツの効果をより詳細に検討する。

2 研究 I

(1) 目的

障害者のみならず、幅広い人を実施対象とするアダプテッド・スポーツを教材として用いた授業を受講することによる、受講生のルールや用具の変更に対する認識の変化、受講生自身のスポーツや運動に対する認識の変化について調査をした研究は管見の限り見当たらない。このような授業を受講することによる受講生の障害者スポーツや障害者に対する興味や関心の変化について調査した研究も少ない。そこで、研究 I では、これらの調査を実施するための質問紙を作成することを目的とする。

(2) 方法

1) 対象

本研究では、N大学で開講されている一般体育実技科目の一つである「アダプテッド・スポーツ」を2016年度に受講した学生229名を調査対象とした。回答に不備のあった者を除いた179名（男性89名、女性90名、平均年齢 18.6 ± 0.90 歳）の有効回答を分析対象とした。

2) 調査方法・時期

本研究の調査は、第2回目の授業（前期2016年4月、後期2016年9月）の中で集合法により実施された。調査実施前には、調査対象者が本研究の主旨を把握できるよう研究の概要、目的、記入方法、そして個人情報保護に関する内容を口頭で説明し、調査協力の依頼に対して承諾を得られた者のみを対象とした。

3) 質問紙

アダプテッド・スポーツを教材として用いた授業の教育効果を検討するため、以下の手続きにより質問紙は作成された。まず、猪俣（1988）、藤田（2003）、永浜・藤村（2011）の調査項目を参考に2つの質問紙を作成した。他方、アダプテッド・スポーツの課題となるルール・用具の変更に対する認識について調査した先行研究が見当たらなかったため、新たに1つの質問紙を作成した。①ルールや用具の変更に対する認識について測る7項目からなる尺度、②スポーツ・運動に対する意識について測る10項目からなる尺度、③障害者に対する関心や障害者スポーツに対する興味について測る7項目からなる尺度である。各項目は「5. とてもそうである」から「1. まったくそうではない」の5件法により回答を求めた。

4) 分析方法

作成された尺度について、「とてもそうである」を5点とし、以下「まったくそうではない」を1点として点数化した。次に各項目について平均値と標準偏差を算出し、天井効果・フロア効果がみられた項目を除外した。残った項目を分析の対象として、初期の固有値1.0以上を基準に因子数を決定して因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。プロマックス回転後の因子パターンから、いずれの因子に対しても、因子負荷量が.40以下の項目を除外し、再度因子分析を行った。各尺度の信頼性については、Cronbachの α 係数を算出した。本研究の分析には統計処理ソフトIBM SPSS Statistics 24を用いた。

(3) 結果と考察

1) 各尺度の因子分析結果

各尺度について因子分析を行った結果、最終的に①ルールや用具変更に対する認識尺度は1因子4項目が抽出された。「体力によってルールや用具を変更してもよい」「上手・下手によってルールや用具を変更してもよい」「体格によってルールや用具を変更してもよい」「性格によってルールや用具を変更してもよい」の体力、技能の熟練度、体格、性格の項目である。この中で性格は一見アダプテッド・スポーツの対象ではないようにみえる。しかしながら、岡沢（1992）は運動に対する態度とパーソナリティの関係を指摘する。外向者は「運動好き」に、内向者は「運動嫌い」になる傾向が強く、集団スポーツを好む者は個人スポーツを好む者よりも外向的であるとしている。これまでの中学校、高等学校の体育実技での経験を通して、受講生は様々な特性を持つ他者と接することで、運動に対する態度とパーソナリティの関係を感じ取り、内向者の積極的な集団スポーツへの参加促進のため、ルール・用具を変更してもよいと判断したのかもしれない。これら4つの項目を、ルールは忠実に守らなくてはならない、用具は決められたものを使用するという態度とは異なる、ルールや用具の変更を容認する態度、「ルール・用具変更の受容」を表すものと解釈した。

次に、②スポーツ・運動に対する意識尺度は、1因子6項目が抽出された。「スポーツ・運動をすることは好きである」「体育の授業は好きである」「スポーツ・運動はできればやりたくない」「スポーツ・運動をすることは得意である」「団体競技のスポーツ・運動は好きである」「スポーツ・運動をすることに意義は感じない」という項目で、スポーツ・運動に対する前向きな姿勢、「スポーツ・運動意欲」を表すものと解釈した。

最後に③障害者に対する関心や障害者スポーツに対する興味尺度は1因子7項目が抽出された。「障害のある人のスポーツを競技場で直接観戦してみたい」「障害のある人のスポーツをテレビや新聞などで見たい」「障害のある人と一緒にスポーツをしてみたい」「障害のある人のスポーツを手伝ってみたい」「ボランティア活動などで障害のある人と関わってみたい」「パラリンピックに注目したい」「街中で障害のある人が困っていたら、手助けをしたい」といった項目で、障害者との関わりや積極的なサポート、障害者のスポーツへの関与を希望するもので、「障害者・障害者スポーツへの興味・関心」と解釈した。各尺度の因子寄与率は59.51～68.30%であった（表1）。

表 1 各尺度の因子分析結果

質問項目	因子負荷量
① ルール・用具変更の受容 ($\alpha=.89$)	
体力によってルールや用具を変更してもよい	.95
上手・下手によってルールや用具を変更してもよい	.85
体格によってルールや用具を変更してもよい	.77
性格によってルールや用具を変更してもよい	.72
因子寄与率(%) 68.30	
② スポーツ・運動意欲 ($\alpha=.89$)	
スポーツ・運動をすることは好きである	.92
体育の授業は好きである	.86
● スポーツ・運動はできればやりたくない	-.84
スポーツ・運動をすることは得意である	.75
団体競技のスポーツ・運動は好きである	.73
● スポーツ・運動をすることに意義は感じない	-.45
因子寄与率(%) 59.51	
③ 障害者・障害者スポーツへの興味・関心 ($\alpha=.92$)	
障害のある人のスポーツを競技場で直接観戦してみたい	.86
障害のある人のスポーツをテレビや新聞などで見たい	.85
障害のある人と一緒にスポーツをしてみたい	.84
障害のある人のスポーツを手伝ってみたい	.83
ボランティア活動などで障害のある人と関わってみたい	.80
パラリンピックに注目したい	.72
街中で障害のある人が困っていたら、手助けをしたい	.58
因子寄与率(%) 62.27	
●は逆転項目	$n=179$

2) 各尺度の信頼性と妥当性の検討

各尺度の信頼性について検討した結果、 α 係数は、①ルール・用具変更の受容尺度で.89、②スポーツ・運動意欲尺度で.89、③障害者・障害者スポーツへの興味・関心尺度で.92であった。各尺度とも高い値を示し、アダプテッド・スポーツを教材として用いた授業の教育効果を検討するために十分な内的整合性をもつ尺度であることを示した。次に妥当性については、アダプテッド・スポーツの授業を担当する大学教員1名とスポーツ心理学を専門とする大学教員2名、障害者スポーツ競技団体の代表を務める障害当事者とともに数回の協議を通して、内容的妥当性の検討を行った。内容的妥当性は、猪俣（1988）や藤田（2003）、永浜・藤村（2011）の先行研究にある質問項目との内容的な一致や授業の教育効果についての検討が可能な内容であることを基準に検討され、妥当性を示していると判断された。

(4) 結論

本研究によって、①ルール・用具変更の受容尺度、②スポーツ・運動意欲尺度、③障害者・障害者スポーツへの興味・関心尺度が作成され、さらにこれらの信頼性と妥当性が認

められた。これにより、実施対象を障害者に限定せず、幅広い人を対象としたアダプテッド・スポーツを教材として用いた授業を受講することによる、受講生のルールや用具の変更に対する受容、受講生自身のスポーツ・運動意欲、障害者や障害者スポーツに対する興味や関心の変化について調査するための質問紙が作成された。

3 研究Ⅱ

(1) 目的

大学の一般体育実技におけるアダプテッド・スポーツを教材として用いた授業の教育効果を、ルール・用具変更の受容、受講生のスポーツ・運動意欲、障害者・障害者スポーツへの興味・関心の観点から検討することを目的とする。一般体育実技というスポーツや運動に対する意欲の多様な学生の混在が予測される授業の中で、意欲が低い学生と意欲が高い学生を比較することで、アダプテッド・スポーツを教材として扱うことの効果をより詳細に検討する。

(2) 方法

1) 対象

研究Ⅰと同様に本研究では、N大学で開講されている一般体育実技科目の一つである「アダプテッド・スポーツ」を2016年度に受講した学生229名を対象とした。回答に不備のあった者を除いた179名（男性89名、女性90名、平均年齢 18.6 ± 0.90 歳）の有効回答を分析対象とした。

2) 調査方法・時期

本研究では授業の効果を検討するため、研究Ⅰで作成した尺度を用いて2時点での縦断的な調査を行った。1時点目の調査は授業の第2回目（前期2016年4月、後期2016年9月）に実施され、2時点目の調査は授業の第11回目または12回目（前期2016年7月、後期2016年12月）に実施された。2時点目の調査時には内省調査も併せて実施した。本研究の調査は全て集合法により実施された。調査実施前には、調査対象者が本研究の主旨を把握できるよう、研究の概要、目的、記入方法、そして個人情報保護に関する内容を口頭で説明し、調査協力の依頼に対して承諾を得られた者のみを対象とした。

3) 授業内容

授業では、運動の得手不得手、年齢や障害の有無などに関係なく楽しめるスポーツについて考えること、ルールや用具を工夫したゲームを実践し、多様な特性やニーズのある人が楽しめるスポーツについて理解を深めることを目的とした。授業初回のガイダンス時に授業のねらいについて説明し、直接的な技能や体力の向上を目的とした授業ではない旨を受講生に説明した。授業は1回90分、全15回で、アダプテッド・スポーツの内容を取り扱った回数はそのうち9回である。授業は1クラス約40名の受講生で実施された。

授業の中でバレーボールを主として扱いながら、ルール・用具の工夫について考えさせた。バレーボールは相手との接触プレイがないので、男女混合でも実施しやすい競技であ

る。また、仲間と空間を分担し、仲間が触れたボールを床に落とさないためのカバーリングが必要となり、「チームワーク」が具体化される場面が保障され、チームスポーツとして教育的意義が大きい（田中，2009）と考えられる。特に、ネットの高さやコートの方さについて変更の自由度が高いこと、レクリエーションバレーボールやソフトバレーボールなどボールの選択肢が多いこと、パラリンピック競技でもあるシッティングバレーボールや視覚障害者のために日本で考案されたフロアバレーボール、重度身体障害者が参加できるローリングバレーボールといったバリエーションが豊かであることが、バレーボール採用の理由である。次に、映像資料や擬似体験を交えながら、視覚障害者が実施できるバレーボールのルール・用具の変更点を考えさせた。その後、視覚障害者が楽しめるスポーツを体験し、実際に視覚障害（全盲）者が参加可能なスポーツや遊びを受講生が考案し、発表するという方法で授業が進められた。表2に各回の授業内容を示した。以下にアダプテッド・スポーツを用いた授業の詳細を説明する。

表2 各回の授業内容

回数	授業内容
1	自己紹介, アイスブレイキング, レクリエーションゲーム
2	通常のルールでのバレーボール
3	ルールを工夫したバレーボール
4	ソフトバレーボール
5	風船バレーボール
6	視覚障害擬似体験(視覚制限体験)
7	視覚障害者スポーツ映像視聴, 視覚障害者スポーツ体験
8	視覚障害(全盲)者が楽しめるスポーツ・遊びの考案
9	視覚障害(全盲)者が楽しめるスポーツ・遊びの発表・相互評価

第1回授業：授業のねらいや方法を説明するとともに、アイスブレイキング、レクリエーションゲーム、自己紹介を行った。スポーツ・運動が苦手な学生は積極的に参加するよう、またスポーツ・運動が得意な学生には苦手な学生がどうすれば楽しめるかを考えるよう促した。

第2回授業：バレーボールの基本的なルールを説明した後にゲームを実施した。

第3回授業：第2回授業でのゲームの様子を振り返り、より多くの人がゲームに参加できるようルールの工夫を考案させ、実践させた。具体的にはサーブ位置や接触回数の変更、ワンバウンド可とするようなルールの変更が考案された。

第4回授業：ソフトバレーボールのルールを説明した後にゲームを実施した。

第5回授業：風船バレーボールのルールを説明した後にゲームを実践した。風船は大きく、軟らかく、軽く、落下速度が遅いといった特徴がある。コート内のメンバー全員が必ず一度風船に触れた（接触回数は一度に限定）後に相手コートに返球するルールでゲームを実施した。1プレイにコート内の全てのメンバーが関与することになり、誰も排除されることなくゲームに参加が可能となる。さらに座位でのゲーム実施や、動ける場所の制限など新たなルールを付け加えることでゲームの難易度の変化を体験させた。

第6回授業：視覚を制限し、いわゆる視覚障害擬似体験として、①日常生活動作、②言葉での説明による運動動作、③手引きによる歩行といった3つの課題を実施させた。受講生は二人組となり、一人が視覚制限をし、一人がそのサポートを行った。芝田（2007）は、擬似体験実施にあたっては、障害者の生活における不便性や困難性というネガティブな側面を理解するだけでは不十分であるとしている。その不便性・困難性を克服できる可能性があるというポジティブな側面の理解も目的とする必要があると述べている。そこで、これら3つの課題を実践する中で、視覚を制限して活動した場合には、視覚以外の聴覚、温度感覚や触覚といった皮膚感覚、位置感覚や運動感覚といった深部感覚等を通して得た情報によって、どのように環境を認知できたか考えるよう促した。一方、サポートをする場合には、環境を認知するための分かりやすい説明とはどのようなものか考えるよう働きかけを行った。また、正しい手引きの方法を教え、手引きをする際には、視覚制限状態の相手に安心感を与えるための工夫をするよう伝えた。最後に、視覚障害者がバレーボールを実施するためのルールや用具の工夫について考えさせた。

第7回授業：視覚障害者の競技映像を視聴させ、その後、サウンドテーブルテニスの主要な課題を実践した。障害者スポーツの映像は、「障害があるにも関わらずスポーツをしている」「障害を乗り越え頑張っている」という過剰な感動を誘うような構成になりがちである。それにより、「スポーツをしている障害者は素晴らしい」というステレオタイプの障害者イメージを視聴者に与える危険性があることを原子（2005）は指摘している。そこで授業では、競技の様子を客観的に伝えるような映像を用いた。また、突然視覚を制限して行動したことによる恐怖心から、受講生の視覚障害者に対する認識が「怖い思いをしている可哀そうな人である」といったネガティブな印象に結びつかないように、視覚制限体験での動きと実際の視覚障害者の動きの違いに気付かせることも意図した。さらに、様々な競技映像を視聴させることで、視覚以外の感覚を用いる具体的なルールや用具の工夫についての情報を得てもらうことを目的とした。サウンドテーブルテニスでは、サーブとリターン局面を取り出した課題を実施させ、ルールや用具の工夫を体験させた。

第8回授業：第6回および第7回の授業内容を踏まえ、グループごとに視覚以外の感覚を使って楽しめるスポーツや遊びを考案させた。

第9回授業：考案したスポーツ、遊びを発表し、相互評価を実施させた。

4) 統計処理

本研究では、授業前後の受講生の変化について検討するため、縦断的調査により得られた各尺度の授業前後の平均値について対応のあるt検定を行った。また、各尺度の授業前

後の平均値におけるスポーツ・運動意欲高位群と低位群の比較について検討するため、対応なし－ありの二要因分散分析を行った。すべての統計分析には、統計処理ソフトウェア IBM SPSS Statistics 24を用いた。有意水準は5%未満に設定した。なお、対応のある t 検定の有意水準はボンフェローニ補正にて1.67%未満に設定した。

(3) 結果

1) 授業受講前後の受講生の変化

アダプテッド・スポーツ授業の受講による効果を検討するため、2時点の縦断的調査により得られたデータから各尺度の得点の平均値を算出し、対応のある t 検定を行った。その結果、①ルール・用具変更の受容尺度では、平均値間に有意な差が認められ ($t(178) = -3.27, p < .01$)、授業受講前に比べて授業受講後の得点が有意に高いことが示された (図1)。②スポーツ・運動意欲尺度では、平均値間に有意な差が認められ ($t(178) = -8.37, p < .001$)、授業受講前に比べて授業受講後の得点が有意に高いことが示された (図2)。また、③障害者・障害者スポーツへの興味・関心尺度においても、平均値間に有意な差が認められ ($t(178) = -8.36, p < .001$)、授業受講前に比べて授業受講後の得点が有意に高いことが示された (図3)。

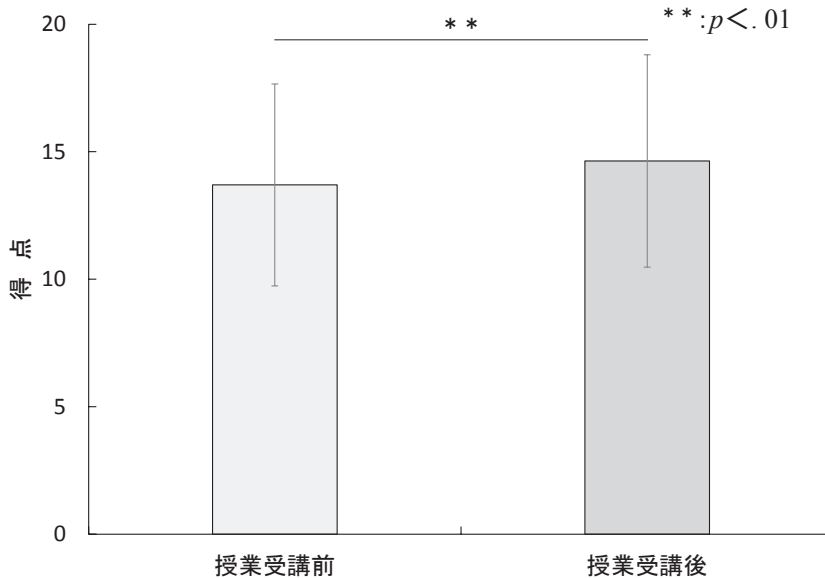


図1 授業受講前後のルール・用具変更受容尺度得点

大学の一般体育実技における「アダプテッド・スポーツ」を用いた授業の教育効果

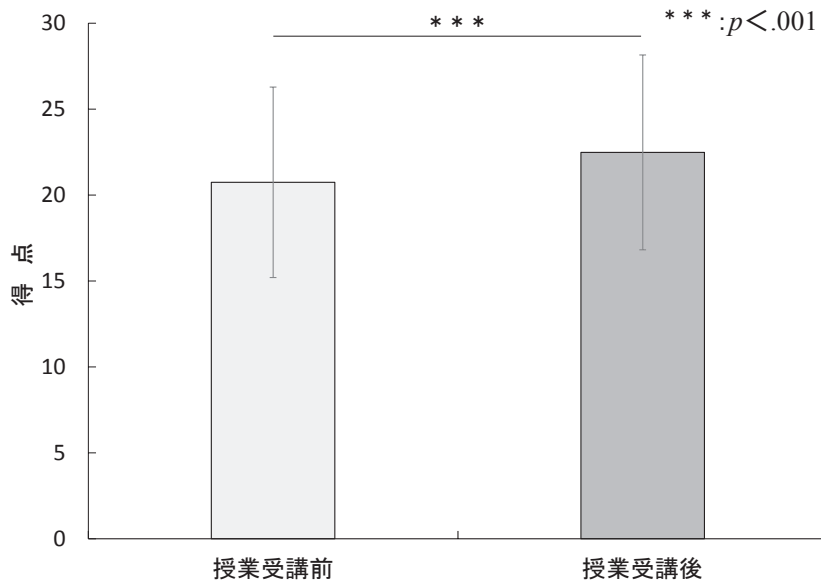


図2 授業受講前後のスポーツ・運動意欲尺度得点

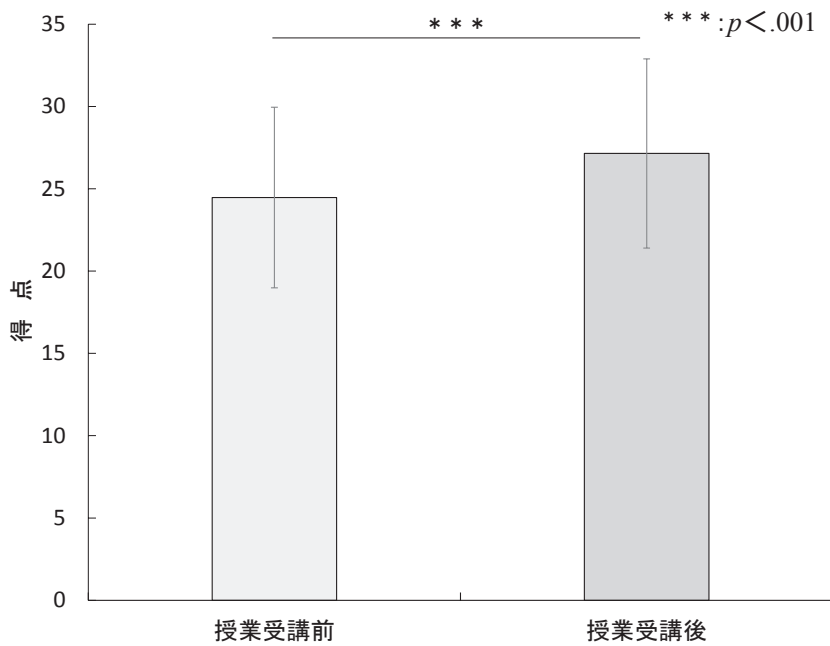


図3 授業受講前後の障害者・障害者スポーツへの興味・関心尺度得点

2) スポーツ・運動意欲高位群と低位群との比較

スポーツ・運動意欲の違う受講生に対して、アダプテッド・スポーツ授業の受講が与える影響の違いを把握するために、本研究では、1時点目のスポーツ・運動意欲尺度の平均値を基準に-1 SD以下をスポーツ・運動意欲低位群（28名：男性15名，女性13名，平均年齢 18.4 ± 0.69 歳），+1 SD以上をスポーツ・運動意欲高位群（25名：男性8名，女性17名，平均年齢 18.5 ± 0.71 歳）として2群に分けた。そして，群（2）×授業受講前後（2）で対応なし－ありの二要因分散分析を行った。その結果を表3に示した。①ルール・用具変更の受容尺度では，授業受講前後要因に有意な主効果（ $F(1,51) = 4.32, p < .05$ ）が認められた。授業受講後が授業受講前（ $p < .05$ ）よりも有意に高い値を示した。②スポーツ・運動意欲尺度では，有意な交互作用（ $F(1,51) = 10.76, p < .001$ ）が認められた。そこで，単純主効果検定を行ったところ，群要因では意欲低位群（ $F(1,51) = 26.20, p < .001$ ）で有意な単純主効果が認められ，授業受講前後要因では授業受講前（ $F(1,51) = 1401.01, p < .001$ ）と授業受講後（ $F(1,51) = 277.76, p < .001$ ）に有意な単純主効果が認められた。意欲低位群において，授業受講前よりも受講後に有意に高い値を示した。なお，授業受講前後ともに意欲高位群が意欲低位群より有意に高い値を示した。③障害者・障害者スポーツへの興味・関心尺度では，群要因及び授業受講前後要因に有意な主効果（ $F(1,51) = 32.82, p < .001$ ）が認められた。意欲高位群が意欲低位群（ $p < .001$ ）よりも有意に高い値を示した。また，授業受講後において，授業受講前（ $p < .001$ ）よりも有意に高い値を示した。

表3 スポーツ・運動意欲高位群と低位群の各尺度平均得点と分散分析結果

		授業 受講前	授業 受講後	群	授業 受講前後	交互 作用	多重比較
①ルール・用具変更の 受容尺度	運動意欲高位群	14.20 (±4.56)	14.68 (±4.46)	n.s.	*	n.s.	授業受講前 < 授業受講後
	運動意欲低位群	14.32 (±3.99)	16.25 (±3.98)				
②スポーツ・運動意欲 尺度	運動意欲高位群	28.84 (±0.85)	29.00 (±1.12)	***	***	***	運動意欲低位群 < 授業受講前 < 授業受講後 授業受講前 < 運動意欲低位群 < 運動意欲高位群 授業受講後 < 運動意欲低位群 < 運動意欲高位群
	運動意欲低位群	12.18 (±2.07)	14.57 (±4.19)				
③障害者・障害者 スポーツへの興味・関心 尺度	運動意欲高位群	27.76 (±4.81)	30.48 (±5.85)	***	***	n.s.	運動意欲低位群 < 運動意欲高位群 授業受講前 < 授業受講後
	運動意欲低位群	22.50 (±5.43)	25.93 (±4.75)				

注) カッコ内標準偏差 * $p < .05$, *** $p < .001$

3) 受講生の内省報告

授業後に実施した内省調査の結果，179名中140名から報告を得た。以下，受講生の内省報告は受講生の文章をそのまま引用する。

授業に対する内容の報告が22件あり，そのうち「スポーツが好きになった」「スポーツが苦手なのでとても不安でしたが，楽しめました」といった感想が9件，「スポーツといっても色々な種類があり，いろいろなやり方があることを知り，とても楽しかったです」「アダプテッド・スポーツを学び，今まであまり考えることのなかった障害のある人のスポーツを実際に体験し，考えることで視野が広がりました。とても良かったです」といった授業を通しての新たな経験についての報告が13件あった。授業に対する報告として否定的な

報告はなかった。

ルール・用具の変更については、「色々なスポーツを少しルールを変えるだけで、皆楽しめていいと思った」「用具を工夫するスポーツは初めは謎だったが、やってみると意外と頭を使って楽しくスポーツすることができた」といった報告が37件あった。「ルールや用具の変更は必要がない」というようなルール・用具の変更に否定的な報告はなかった。

障害者に対する認識については、「実際にアイシェードをして視覚障害の体験をすることで、視覚障害を持った人が苦勞することや不安に思うこと、逆に障害を持たない人と変わらない点について感じることは大きな経験になったと思う」「障害者に対する意識が高まりました。接する機会があれば、どんどん関わって行きたいと思う。その人達に立った考え方もよりできるようになった」という、障害者を特別視せず、具体的な活動制限とそれを補う環境因子について考え始めている様子がうかがえる報告が13件あった。逆に「障害のある人はスポーツをするなんて、とても勇気があると思う」「障害のある人は普段どのような生活をしているのが体験できて、すごくこわかったり、生活で不便なことが多いと思いました」といった障害者の特別視や障害の強調につながったと考えられるものが7件あった。

障害者スポーツに関しては、「障害のある人でもルールを変更すれば、楽しくスポーツを出来ることがわかった。授業内で見たビデオで、目の見えない人が手かげんをせずに思いつきバレーボールをしている所を見て、障害があっても楽しめることがわかった」「バレーボールを通して、障害のある人がどのように工夫をすれば楽しめるか改めて考えさせられた」といった障害者のスポーツ実施の可能性に関するものが35件、「障害のある人のスポーツはとてもレベルが高くて感動した。ぜひパラリンピックを見てみたい」「授業を通して障害のある人のスポーツに興味を持ちました。もっと知りたいです」といった興味喚起に関するものが26件あった。「障害者がスポーツするのは危険」「障害者と一緒にスポーツするのは困難」というような否定的な認識を示した報告はなかった。

(4) 考察

1) ルール・用具変更の受容

アダプテッド・スポーツを教材として用いた授業受講生のルール・用具変更の受容の度合いは、授業受講後に高まった。スポーツ・運動意欲高位群と低位群に分けてみた場合においても同様の結果となった。授業受講後にルールや用具を変更することに対する受容の度合いが高まった要因について以下に考察する。

まず、ルール変更の受容に対する認識は、「面白さの保障」(守能, 2007)という観点から促進されたものと推測される。守能は、面白さには多様な意味内容のものが含まれるとし、『『快い』『心地よい』『楽しい』『小気味よい』『手に汗握る』『痛快』『豪快』『爽快』など、まさしくそうしたあらゆる意味においてスポーツは面白く、かつそうした、『面白さ』をルールはスポーツに保障する』のだとしている。「スポーツのルールとは何が面白いかわからないかについての、主観的な判断を中身とする合意的な宣言」で、あるルールに従うとゲームが面白くなるということであれば、そのルールは変えられても良いとしている。第1

回授業における通常ルールでのバレーボールでは、サーブが入らない、サーブだけで試合が終わる、ラリーが続かないといった状況が起こり、ゲームが成り立たなかった。そこで、第2回授業においてルールの変更を行ったことで、ゲームが成立し、面白さが感じられるようになったことが推察される。また、第5回授業で扱った風船バレーボールでは、ルール上全員の参加が促進できるが、風船の特徴から受講生にとって課題が容易すぎるため冗長なゲームが観察された。そこで、全員が座位で行う、移動範囲に制限を設けるなどの新しいルールを加えたところ、課題の難易度が上がり、ゲームに「面白さ」が増したことが推察される。「自分でルールを工夫することで楽しくスポーツをやることに気づけた」「自分たちでルールを変えたり、新しく付け加えることでスポーツがより面白くなると思った」といった「面白さの保障」を裏付けるような内省報告もみられた。

次に、用具の変更についてみる。世羅（2000）は、通常のバレーボールではボールを怖がっていた者がソフトバレーボールの接触感覚の良さを理由に積極的にゲームに取り組む様子を報告している。その理由としてボールが柔らかいことで痛みが軽減されることを挙げている。第4回授業でソフトバレーボールを扱ったが、通常のバレーボールではボールに手が出せなかった学生が、積極的にボールに触れようとしている様子が、当該授業の受講生の中にも観察された。また、「私はバレーボールに苦手意識があったが、やわらかいボールを使った時、初めて楽しいと思えてうれしかった」という内省報告があった。

また、後半の授業において、視覚障害者のスポーツを扱った。スポーツをする上で視覚は重要であり、視覚を用いることができなければ、ほとんどの競技が実施不可能となる（正化，2002）と指摘する研究者もいる。しかしながら実際には視覚に障害があっても、視覚以外の感覚を活用できるようルールと用具を工夫し、スポーツを実施している。普段、視覚に頼って生活をしている受講生が、その視覚を制限して、日常生活動作やスポーツを体験し、さらには新しいスポーツや遊びを考案することで、スポーツ実施者に合わせてルールと用具を変更することの必要性を実感していったことも推察できる。「ルールや道具を工夫すれば、障害のある人でも十分にスポーツを楽しむことができる」「ルールの工夫や用具の使い方次第で、だれでも楽しくスポーツができる」「スポーツに対する認識が変わった。ルールを変えれば楽しみ方が増えるとわかった。授業を受ける前よりは明らかにスポーツが好きになった」といった内省報告もみられた。

2) スポーツ・運動意欲

スポーツ・運動意欲を高めるためには、内発的動機づけが重要となるであろう。内発的動機づけは「有能さ」と「自己決定」の感情を求めようとする欲求に基づくとしたのは、デシ（1980）である。デシは、「自己決定」を自分が環境に影響を与えている、効果的に働きかけているという認識、「有能さ」を自分の環境を効果的に変えることのできる能力、効果的に処理できた時に感じられる満足感であるとしている。当該授業の受講生は、授業でのルール・用具の工夫という新しい課題を解決していくことで自己決定と有能さの認知を得ていた可能性がある。これにより、授業受講後にスポーツ・運動意欲の向上がみられたのかもしれない。「用具を工夫するスポーツは初めは謎だったが、やってみると意外と頭を使って楽しくスポーツすることができた」「普段と違う体験ができて楽しかったです

し、工夫1つで皆が楽しめるスポーツを作れるということが面白かったです」「この授業を通して誰もが楽しめるスポーツについて考えることの大切さを学びました」「皆が楽しくできるように工夫したりするのは大変だけど、皆が楽しく笑ってやっているので全然苦労じゃないなと思いました」という内省報告があった。

スポーツ・運動意欲に関連する要因として有能感（岡澤，2003）が挙げられる。岡澤は、「チャレンジによる達成によって獲得される自信、つまり、自己有能感の形成こそが運動の楽しさを求め、さらなる運動参加をうながすためにも重要である」と述べている。有能感は運動能力や運動技能を基礎とした自信とも言える。そのため、岡澤は有能感の向上には運動能力や運動技能の向上が不可欠であるとしながらも、運動能力や技能に対する肯定認知である「身体的有能さの認知」だけでなく、練習や努力をすれば上手にできるという自信の「統制感」、教師や仲間に受け入れられているという自信の「受容感」の3つの因子で運動有能感をとらえることが必要だとしている。当該授業では、練習や努力による技能の上達が感じられる課題は設定されていなかった。しかし、ルールや用具を変更することで、「できた」という統制感に似た感情や、ルール・用具の工夫という過程の中で、互いに話し合いを重ねることで、仲間に受け入れられているという受容感を得ることができた可能性はある。当該授業の中で、受講生の有能感が形成されたことで、スポーツ・運動意欲の向上がみられたのかもしれない。

杉原（2008）は「運動技能が上達すればするほどその運動の持つ魅力・醍醐味を深く味わうことができるようになる」と指摘する。特に難しい課題に挑戦し克服できた時に強烈な自己決定と有能さの認知が得られ、ますますその運動に引きつけられると言う。しかしながら、当該授業においては、技能が未熟な者、運動能力が低い者もゲームに参加できるようなルールや用具の工夫、変更に重点を置き、運動技能の上達を目指した内容は行っていない。その点において受講生のスポーツ・運動意欲が低下するのではないかという懸念があったが、受講生のスポーツ・運動意欲は、授業受講後に有意に高い値を示した。スポーツ・運動意欲高位群と低位群の2群に分けて検討した結果、スポーツ・運動意欲は、授業受講後においても、意欲高位群が低位群よりも優位に高い値を示した。しかしながら、意欲高位群の授業受講後の意欲は低下しなかったものの、更なる向上はみられなかった。元々スポーツ・運動意欲の高い学生の意欲をさらに向上させる課題の設定等について検討していく必要がある。

それに対し、スポーツ・運動意欲低位群においては、スポーツ・運動意欲が授業受講前よりも受講後に有意に高い値を示した。バンデュラ（1979）は、「可能の確信の程度が、困難な状況へ立ち向かうか否かを決定する。人は、自分が対処できないと思う脅威の状況を恐れ、避ける。しかし、うまく処理できると判断した時は、確信をもって行動する。自己可能感は予期的抑制や予期的恐怖を低減するだけでなく、実際に成功できるという予想により、場面に対処しようとする努力に影響する」としている。つまり、ルールの変更をしたり、ソフトバレーボールや風船へと用具を変更したりすることで、スポーツ・運動意欲の低かった学生が、自分も参加可能であると判断したのかもしれない。または、課題の難易度を低くすることにより成功体験を重ねられたことが、意欲の向上につながったのか

もしれない。

授業後の内省調査では、「もともと体育は苦手だったけれど、バレーボールを工夫して風船などを使ったバレーボールはとても楽しかったです」、「スポーツは苦手だと思い込んでいたが、ルールや用具を工夫することで自分でも楽しめるスポーツがあることを知り、スポーツをすることが少し好きになった」といった報告を得た。岡澤(1998)はゲームのルールを変更して、技能レベルの低い児童・生徒に役割を与えることも有能感を高めることに効果があると述べている。岡澤が対象としたのは児童・生徒ではあるが、ルールや用具の変更がスポーツ・運動意欲の低い受講生の有能感の向上にも影響を与え、スポーツ・運動意欲が高まった可能性がある。

3) 障害者・障害者スポーツへの興味・関心

授業受講後に、受講生の障害者や障害者スポーツに対する興味や関心が喚起されたことが明らかとなった。スポーツ・運動意欲高位群、低位群においても同様の結果であった。

当該授業では、第6回目以降、視覚障害を取り上げ、擬似体験、視覚障害者スポーツの映像視聴、視覚障害者スポーツ体験、視覚障害（全盲）者が楽しめるスポーツや遊びの考案、発表を行った。

小野・徳田ら(2016)は中学生、高校生を対象に、障害者スポーツの競技映像を視聴させた群と障害者の努力や家族の苦労を取り上げた情緒的エピソードが強調されたドキュメンタリー番組を視聴させた群での違いを比較した。その結果、競技映像を視聴した群の方が、ドキュメンタリー番組を視聴した群に比べ、障害者を共生する他者として受容的にとらえたことを明らかにした。障害者に対する受容や共生を促すうえでは競技映像は効果的であるとしている。当該授業においても情緒的な内容を含まない競技映像（陸上競技走り幅跳び、フロアバレーボール、サウンドテーブルテニス、ブラインドサッカー、ボウリング）を視聴させたことが、障害者や障害者スポーツの興味・関心の喚起につながった可能性が考えられる。

また、内田・大谷(2013)は、障害者スポーツ実習と擬似体験における障害理解の差異について検討する中で、障害に関する知識を提供するだけであったり、障害擬似体験だけで終わったりすることなく、バリアや能力障害への支援や指導を考え、障害者の能力への気づきを促す振り返り教育が重要だとしている。当該授業においても、視覚を用いることができないことで起こる単独歩行や通常のルールでのバレーボールの困難といった活動制限を体験させ、次にその制限が起こらないよう、または軽減するよう、環境因子として視覚以外の感覚を活用できるようなルールや用具の工夫、サポートについて考えるよう促した。つまり、アダプテッド・スポーツの考え方を採用することで、スポーツをする際に重要な視覚を用いることができない人であっても、他の感覚を用いたり、サポートを受けたりすることでスポーツが可能になるという気づきを促した。

授業における擬似体験、映像の視聴、視覚障害（全盲）者が楽しめるスポーツの考案を通して、障害者や障害者スポーツの興味・関心の度合いが高まったことが考えられる。内省調査では「障害があっても思ってたよりたくさんことができると学ぶことができました」「障害のある人々が日常生活やスポーツをするにあたってどんなことに不便を感じて

いるのかということをやより理解していく必要があると思った」「障害者も一緒に出来るようなスポーツも、他のスポーツと同様に難しく競技性があり楽しむことができるものだったのが意外だった。健常者と変わらずに熱い試合を行なう姿がかっこよかった。パラリンピックも見てみたいと思う」といった障害者や障害者スポーツに対する興味・関心を示した報告がみられた。一般体育実技において、アダプテッド・スポーツを教材として用いた授業を受講することで、障害者や障害者スポーツに対する興味・関心の度合いが向上したことは、先行研究（大山，2017）を支持するものであった。

受講生の障害者や障害者スポーツに対する興味・関心が授業受講後に喚起されたものの、内省報告の中には「私たちが普段目で情報を得ているものを、全盲者の人は他の感覚を使ってやっている所に特殊な能力を感じた」「障害者、特に全盲の人に関して学んだが、やはり目がみえないというハンデは日常生活上大変なことだと感じた」という、障害者の特別視や障害の強調につながったと考えられる報告があった。教材の選択や課題の設定については、さらなる改善が必要である。

スポーツ・運動意欲高位群と意欲低位群を比較した結果、低位群に比べ、高位群において、障害者・障害者スポーツに対する興味・関心の得点が有意に高かった。澤江・齊藤ら（2011）は、アダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容を検討する中で、非体育専攻学生においては、「するスポーツ」の関心を高めることで、アダプテッド・スポーツ活動への関心をより高められると推測している。本研究において、スポーツ・運動意欲の高い学生、おそらく「するスポーツ」に関心が高いであろうと考えられる学生において、障害者・障害者スポーツに対する興味・関心が高かったことは、澤江・齊藤らの研究を支持するものであった。

(5) 結論

本研究の目的は、大学の一般体育実技においてアダプテッド・スポーツを用いた授業の効果を受講生のルール・用具変更の受容、スポーツ・運動意欲、障害者・障害者スポーツへの興味・関心の観点から検討することであった。その結果以下のことが明らかとなった。

- 1) 授業受講後に受講生のルールや用具を変更することに対する受容の度合いが向上した。
- 2) 授業受講後に受講生のスポーツ・運動意欲が向上した。スポーツ・運動意欲の低い受講生の意欲が授業受講後に向上した。
- 3) 授業受講後に受講生の障害者や障害者スポーツに対する興味や関心が高まった。スポーツ・運動意欲の高い受講生は、低い受講生に比べ障害者や障害者スポーツに対する興味・関心が高かった。

4 今後の課題と展望

アダプテッド・スポーツの一つである障害者スポーツを教材として扱った授業における教育効果を測る研究は散見される。しかし、体力の低い者、運動能力の低い者、技能の未熟な者など実施対象を幅広くとらえたアダプテッド・スポーツの観点から教育効果の検討

がなされた研究は少ない。また、先行研究における調査の内容も障害や障害者、障害者スポーツ、アダプテッド・スポーツに対する受講生の認識の変化を扱ったものがほとんどで、ルールや用具の変更に対する認識や受講生自身の運動・スポーツに対する認識の変化に注目した研究は少ない。そのような中で、大学一般体育実技において、実施対象者を幅広くとらえたアダプテッド・スポーツを教材として用いた授業を受講した学生のルールや用具の変更に対する受容、スポーツ・運動意欲の変化を明らかにした点において、本研究の意義は高いといえよう。アダプテッド・スポーツがスポーツ・運動意欲の低い学生の意欲向上に資するかもしれない。しかしながら、本研究ではアダプテッド・スポーツを教材として用いた授業の受講生のみを対象としており、他の競技種目や内容を扱う体育実技科目の受講生との比較検討には至っていない。他の体育実技科目受講生も含めた多母集団の同時分析を行ない、アダプテッド・スポーツを教材として扱うことの意義、アダプテッド・スポーツそのものの意義についての更なる検証が必要である。

〔参考文献〕

- 猪俣春世（1988）「運動意欲を測る－小・中学生を対象として－」『学校体育』第41巻，第7号，pp.138-144。
- 植木章三（2017）「アダプテッド・スポーツ総論」『イラスト アダプテッド・スポーツ概論』植木章三・曾根裕二・高戸仁郎編，東京教学社，p.4。
- 内田若希・大谷まや（2013）「障害者スポーツ実習と障害疑似体験における障害理解の際の検討」『障害者スポーツ科学』第11巻，第1号，pp.33-41。
- 大山祐太（2015）「大学資源活用によるアダプテッド・スポーツの振興とその意義－共生社会の実現を目指す視点から－」『芸術・スポーツ文化学研究』北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツ文化学研究編集部会，大学教育出版，p.65。
- 大山祐太（2017）「大学の一般体育におけるアダプテッド・スポーツ実践の教育効果」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第67巻，第2号，pp.267-276。
- 岡沢祥訓（1992）「体育の立場からみた子ども」『体育科教育法講義』宇土正彦・高島稔・永島惇正・高橋健夫編，大修館，pp.20-22。
- 岡沢祥訓（1998）「なぜ、有能感なのか」『体育科教育』第46巻，第4号，pp.70-72。
- 岡沢祥訓（2003）「運動好きと自己有能感」『体育の科学』第53巻，第12号，pp.905-909。
- 小野聡子・徳田克己・水野智美・西館有沙（2016）「障害者スポーツの視聴が青少年の障害観に与える影響－障害理解教育の観点から－」『障害理解研究』第16号，pp.21-29。
- 金山千広・山崎昌廣（2010a）「特別支援教育を踏まえた体育授業と教員養成－小・中学校教員養成コースにおけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況－」『聖和論集』第37号，pp.9-18。
- 金山千広・山崎昌廣（2010b）「特別支援教育を踏まえた小・中学校の体育教員養成に対する大学教員の意識」『聖和論集』第38号，pp.19-27。
- 草野勝彦（1999）「バリアフリーの授業の意義」『体育科教育』第47巻，第9号，pp.30-32。

- 草野勝彦 (2004) 「障害者スポーツ科学の社会的課題への貢献」『障害者スポーツ科学』第2巻, 第1号, pp.3-13。
- 澤江幸則・齊藤まゆみ・柄田毅・井田智之・村上祐介・牧佑耕・荒川歩美・中原陽子 (2011) 「体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容について～非体育専攻学生との比較を通して～」『障がい者スポーツ科学』第9巻, 第1号, pp.35-45。
- 芝田裕一 (2007) 「視覚障害の疑似障害体験実施の方法及び留意点－手引きによる歩行を中心として－」『兵庫教育大学研究紀要』第30巻, pp.25-30。
- 正化圭介 (2002) 「ものが見えるメカニズム」『スポーツビジョン[第2版]』真下一策編, ナップ, p.1。
- 杉原隆 (2008) 『新版 運動指導の心理学』大修館, pp.136-140。
- 世羅晶子 (2000) 「生涯スポーツにおける学校体育のあり方－バレーボールの授業(ソフトバレーボールの導入)を通して－」『広島大学附属中・高等学校研究紀要』第47号, pp.53-58。
- 曾根裕二 (2016) 「アダプテッド・スポーツの体験が体育専攻学生の障害理解に及ぼす影響」『大阪体育大学健康福祉学部研究紀要』第13巻, pp.53-62。
- 田中愛 (2009) 「差異を許容するスポーツ実践の探究(1)－シッティングバレーボールを手掛かりに－」『武蔵大学人文学会雑誌』第40巻, 第3号, pp.65-79。
- 田中愛 (2013) 「青少年が身に付ける「教養としてのスポーツ」学習プログラムモデルの構築－アダプテッドスポーツを用いた実践的授業作り研究－」『SSFスポーツ政策研究』第2巻, 第1号, pp.277-285。
- デシ E.L.: 安藤延男・石田梅男訳 (1980) 『内発的動機づけ－実験社会心理学的アプローチ』誠信書房, pp.60-79。
- 永浜明子・藤村弘子 (2011) 「アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第I報)－アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から－」『大阪教育大学紀要』第60巻, 第1号, pp.39-49。
- 永浜明子 (2013) 「「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル－アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から(第Ⅲ報)」『大阪教育大学紀要』第61巻, 第2号, pp.47-60。
- 波多野義郎・中村精男 (1981) 「「運動ぎらい」の生成機序に関する事例研究」『体育学研究』第26巻, 第3号, pp.177-187。
- 原子はるみ (2005) 「障害者スポーツ」『障害理解－心のバリアフリーの理論と実践』徳田克己・水野智美編, 誠信書房, pp.180-183。
- バンデュラ: 原野広太郎訳 (1979) 『社会的学習理論－人間理解と教育の基礎－』研究社, p.90。
- 藤田紀昭 (2003) 「障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究」『日本福祉大学社会福祉論集』第108号, pp.45-54。
- 藤田紀昭 (2006) 「障害者スポーツ」『最新スポーツ科学事典』日本体育学会, 平凡社, p.385。
- 藤田紀昭 (2008) 『障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か』角川学芸出版,

p.3。

藤田紀昭・金山千広・河西正博（2014）「保健体育教員免許の取得可能な大学における障がい者スポーツ関連科目の実施状況に関する研究」『同志社スポーツ健康科学』第6号，pp.29-37。

守能信次（2007）『スポーツルールの論理』大修館，pp.57-67。

文部科学省（2008a）『中学校学習指導要領』 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/__icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf,（参照2017-11-30）。

文部科学省（2008b）『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf,（参照2017-11-30）。

文部科学省（2009a）『高等学校学習指導要領』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf,（参照2017-11-30）。

文部科学省（2009b）『高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1282000_7.pdf,（参照2017-11-30）。

文部科学省（2017）『スポーツ基本計画』 http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf,（参照2017-11-30）。

矢部京之助（1997）「アダプテッド・スポーツの提言」『ノーマライゼーション 障害者の福祉』第17巻，通巻197号，pp.17-19。

矢部京之助（2004）「アダプテッド・スポーツとは何か」『アダプテッド・スポーツの科学～障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論～』矢部京之助・草野勝彦・中田英雄編，市村出版，pp.3-4。

(Abstract)

This study looks at the effect of "adapted sports" in terms of general physical education course material in tertiary education. A questionnaire was designed to assess (1) the acceptance of modifying rules and equipment, (2) motivation for training and playing sports, and (3) interest in and concern for disabled people and sports for disabled people among the students. The findings are as follows.

First, the degree of acceptance of modifying rules and equipment to meet the physical needs of players became higher after taking the course. This indicates recognition of the need for ensuring an element of fun when playing a game and a concomitant need to modify rules and equipment for visually impaired people and others to play sports.

Second, motivation for playing sports as well as the impact of physical training of students improved after the course, which indicates that respondents acknowledged the significance of tasks involving flexibility concerning rules and equipment with "adapted sports". The group with low motivation toward sports and exercise showed higher motivation after the experiment. This is due to the experience of having better accessibility to sports involving modifiable rules and alternative equipment which raised respondents' motivation.

Lastly, the interest in and concern for disabled people and sports for disabled people among respondents increased after the course. This is due to watching videos of sports competitions played by disabled people, experiencing daily activities of disabled people, and designing new sports for disabled people, all of which served to deepen students' understanding of disability and sports for disabled people.